平成２３年９月１日発行

かまにし

特別記念号

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

創刊十周年を祝して

大田区長　松原忠義

「かまにし17」創刊十周年おめでとうございます。

大田区には、十八の出張所があり、それぞれの地域でそれぞれの地域情報紙を発行していただいております。

特に、蒲田西地区で発行している「かまにし17」は、一面のわがまちの顔、二、三面の特集、四面のコラムまで特色を持った記事が紙面を飾っています。十年一昔とはいえ、地域の情報を十年間発行し続けることは大変なご苦労があったことと思います。これもひとえに都築編集長を始めとする編集委員の皆様のわがまちを愛する気持ちの表れではないかと存じます。

大田区では、昨年十月の羽田空港再国際化に伴いまして、国際都市おおたを目指して取り組んでおります。その一つに「世界とつながる生活観光都市」の取り組みがあります。これは、日常の生活空間や地域の魅力を観光資源としてアピールしていこうとするものです。このためにも、より多くの地域情報を発信していくことが重要になります。地域情報紙は、まさにこの担い手としてご活躍いただきたいと考えております。これからも、よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、「かまにし17」がさらなる飛躍の一歩を踏み出し、地域と共に歩み続ける情報紙として愛読されますことをご祈念申し上げ、祝辞といたします。

十周年に寄せて

蒲田西地区の皆様には、日頃より自治会・町会の活動にご協力いただき、心よりお礼申し上げます。

この度、蒲田西地区地域情報紙「かまにし17」が創刊十周年を迎えました。これもひとえに、ご愛読いただいております地域の皆様のおかげと、心より感謝申し上げます。

蒲田西地区の自治会・町会では、春と秋の交通安全運動や防災訓練、地域美化活動などを通じて安全・安心のまちづくりに取り組んでおります。地域情報紙「かまにし17」の発行もその一つです。平成十三年九月以来、地域で活躍されている方々や地域の歴史などを中心に、蒲田西地区のさまざまな情報を発信してまいりました。地域の皆様に地域のことをより知っていただき、地域に愛着を持っていただくことが、地域力の向上に繋がっていくのだと考えております。

今後も、皆様に楽しんでいただける情報紙になるよう、自治会連合会としても連携してまいりますので、これからもご愛読くださいますようお願い申し上げます。

蒲田西地区自治会連合会会長
小谷野　正義

松原区長との座談会

中村出張所長より参加編集委員の紹介に続き懇談に入る

都築編集長　現在、十八連合会ではそれぞれ特色をもった地域情報紙を作成しているが、「かまにし17」はその中でも異色の存在と思う。できるだけお知らせ的な物は排除し、読み物に重点を置いている。埋もれた地域の歴史や文化を掘り起こし、奥行きを持たせた記事をと心がけている。

山﨑委員　蒲田東口にはかつて撮影所があり、西口にも俳優、女優さんたちが多く住んでいた。

区長　前号でも田中絹代さんを取り上げていますね。小沢昭一さんも女塚に住んでいた。この間も大田区に来てもらい、講演をお願いしたが、映画の話になると、本当に話が尽きない。池上にはフランキー堺さんが住んでいて、小沢昭一さんと麻布中学で同級生だった。

小谷野連合会長　昔、小沢写真館という写真屋さんだった。

都築　小沢昭一さんも記事にしたいが、現役で活躍してる人は取材に制約があり難しい。何時でも取り上げられるように資料だけは揃えている。

区長　蒲田西は庶民的な町。地域情報紙なので、蒲田西の管内にもその気で探せば、まだまだ色々なものがあるはず、現在も過去も未来にも広げていけばいい。

都築　そうですね。あまり過去にこだわると、行き詰ってしまうと思います。小沢昭一さんの本に、近くの原っぱでサーカス興行があり、火災でテントが焼け落ち、多くの動物が焼け死んだという話が載っている。会議でその話をすると、次回にはある編集委員さんが大変苦労して昭和十四年三月十九日の朝日新聞の記事を探してきてくれた。

左から高橋委員、伊藤委員、石渡委員、小谷野連合会長、都築編集長、松原区長、柳通委員、山﨑委員、鎌田委員、遠藤副区長

山﨑　今度、蓮沼中学で開催される「社会を明るくする運動」でも、四十号で取り上げた天沼さんがゲストティーチャーとして参加される。保護司さんが「かまにし17」を読んで天沼さんにお願いしたとのこと。このようなところで「かまにし17」が出てくるとは驚いた。

都築　一年ほど前、小谷野連合会長のシベリア抑留の話を取り上げました。

区長　私も読ませていただいた。あの記事はジーンときた。あのような話はぜひ後世まで語り継いでいくことが大切だ。

小谷野　あの後、城南タイムズの取材が来たりして、反響の大きさに驚いた。

柳通委員　日本工学院のあたりに住んでいた穂積さんのことを、小谷野会長はご存知ありませんか？

小谷野　直接には知らないが、うっそうとした木々が茂る大きな屋敷があった。

区長　徳持小学校のところに競馬場があった。池上警察署の裏に馬頭観音がある。あれも競馬場の名残です。昔といえば雪谷では、昔の中原街道と現在の写真を比べた写真集を発行した。大森でも昔の街並みの写真をかなり集めている。このような取り組みが地域と住民の絆を深めていく。自分たちの地域を知ってもらう。それが地域力の結集に繋がってくると考える。「かまにし17」の皆さんにも一層のご尽力をお願いしたい。

六月二十三日　於区長室

編集後記

まず創刊十周年記念号はカラー刷りと決まった。特集内容はカラーが映える写真や絵をふんだんに使用する。もちろん記念号に相応しい内容でなければならない。だが、そんな物が一体何処にあるんだ。頭を抱え込んでいたところに、まるで降ってわいたように、いったんボツになった五年前の矢口高雄先生の原稿と色紙の使用に、本人が了承してくれた、との知らせが入った。人間誰しも欲がある。新しく色紙に「祝創刊十周年」と入れば、これはもう決まりだ。恥も外聞もなくおねだりするしかない。矢口高雄先生の太っ腹に感謝。

編集委員長　都築　保二

情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などを事務局までお寄せ下さい。
事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七－十二－七
℡（三七三二）四七八五

釣りキチ三平 マンガ家 矢口高雄

駅前居酒屋　清水屋

ボクの本名は高橋高雄である。ボクがマンガ家を志し上京したのは、昭和四十五年（一九七〇）六月で、それまでは故郷秋田で十二年間、銀行員をしていた。年齢も三十を数えていた。しかも結婚をしていたし、三歳と一歳の娘の父親でもあった。

そんなひねたマンガ家志望のボクのスタートは、矢口渡駅から歩いて三分、畳一間の木造アパートからだった。何故、ここをスタートの起点に選んだのか。それは、秋田県人のボクにとって、東京における唯一の親戚の家がここにあったからである。当時の目蒲線矢口渡駅前に「清水屋」という居酒屋があった。居酒屋に転ずる前は「魚常」と称する魚屋だった。実はその居酒屋の女将さんがボクの叔母（父の妹）だったのだ。

清水屋には、男ばかりの四人兄弟がいた。なかでもその長兄、武とは同い年生まれで、戦時中にはボクの郷里に疎開していた一時期があって、兄弟のようにして育った。そんな経緯があったので、上京にあたってこのボクの頼みの綱は叔母であり、長兄の武だった。武にあらかじめアパートを契約してもらい、住所が決るや荷物と共に上京したのである。第二国道の大田農協の信号を渡ってすぐ、矢口二丁目の、木造モルタル二階建て六畳一間だった。

妻子を郷里に残して単身での上京で、何はともあれデビューを果たすことが先決であった。いくばくかの自炊もしたが、大半は清水屋で、ほとんどただ同然の賄いに頼ることとなった。徹夜をして目覚めると、入口ドアのノブにお握りや枝豆の入った袋がぶら下がっていたことが一度や二度ではない。叔母や武のさり気ない心遣いだった。

上京後約三ヶ月、少年週刊誌（少年サンデー）にデビューが叶い、余勢を駆って同誌に新連載をスタートさせる幸運に恵まれた。しかし、それは同時に矢口渡に別れを告げることでもあった。妻子を呼び寄せるためのアパートと、作品を描くアトリエの関係から東横線の自由が丘に移転が決まった。矢口渡にお世話になったのは六ヶ月たらずのことだった。

ペンネーム矢口高雄

だが、居住期間とは裏腹に、ボクにとっての矢口渡は終生忘れ得ぬ地となった。それは、少年サンデーに新連載を開始するための打ち合わせの場にさかのぼる。新連載のタイトルは「おとこ道」で、この作品には原作者がいた。今日ではもう故人となられたが、当時、「巨人の星」や「あしたのジョー」の原作者で大人気の梶原一騎先生だった。

その梶原先生との初めての打ち合わせの席でのことだった。冒頭でも記したが、ボクの本名は「高橋高雄」である。梶原先生がポツリと言った。

「どうも高橋高雄ってのはあまりにもありきたりで平凡だなァ、なんかこうバシッとパンチの効いた名前はないもんかなァ・・・」

「ハァ・・・？」

「あのネ、マンガ家の名前ってのは、まず強力なパンチがなくっちゃあいかん。わかり易くて親しみやすく、それでいて一度見たら忘れないインパクトを持った名前だ」

梶原先生の提案はペンネームを決めようだった。これにはボクも即座に同意した。梶原先生に言われるまでもなく、ボク自身もアマチュア時代に色々なペンネームを考えたこともあったからだ。編集部もこの提案に賛成で、いつの間にか打ち合わせの席がボクのペンネームを考える場となっていた。梶原先生もいくつか思い浮かぶ名前を口にされたが、僕にはいま一つピンとくるものがなかった。ボクとしては田舎の親父やおふくろが見たとき、ボクが描いた作品であることがわかる様に、せめて本名の「高雄」だけでも生かして欲しいと主張した。ただ時間ばかり過ぎていく、その時だった。同席していた若い編集者（この方はその後ボクの担当記者になった）が、遠慮気味に口を開いた。

「矢口ってのは如何でしょう。高橋さんは現在大田区矢口二丁目にアパートを借りています。つまり、マンガ家としてスタートする記念すべき地名にちなんで・・・」

言い終わるや否や梶原先生が大声を発した。

「よーし、それで決まった、それで行こう、いいペンネームだ」

これがボクのペンネームの由来であり、名付け親は故梶原一騎先生だったのである。当時大人気の「あしたのジョー」の主人公名が矢吹丈だったことを考えると、有無をいわぬ一声でボクのペンネームを決めてしまった梶原先生の心意気もうなづける様な気もする。

かくして、「矢口姓」を名乗って今年で三十六年目である。

2006.1.21　矢口高雄

プロフィール

矢口高雄は一九三九年秋田県平賀郡増田町生まれ、少年時代を奥羽山麓の村で、山と川を駆け巡り、マンガ少年、釣りキチ、昆虫少年として過ごす。小学校三年の時、手塚治虫著「流線型事件」を手にして、一気に漫画のとりこになり、手塚治虫をなくしては夜も日も明けない手塚中毒になり、「絶対漫画家になる！」と純朴いちずに漫画家を目指す。

県立増田高校卒業後、羽後銀行（現・北都銀行）に勤めるが、漫画への夢絶ちがたく、昭和四十五年（一九七〇）に十二年勤めた銀行を退職してプロの道を目指して上京。釣りをテーマにした「鮎」（少年サンデー）でデビューを果たす。デビュー三年後の一九七三年「釣りキチ三平」の連載を開始、一躍人気を集める。翌一九七四年「釣りキチ三平」「幻の怪蛇バチヘビ」で講談社出版文化賞（児童まんが部門）、一九七六年「マタギ」で日本漫画協会大賞を受賞。

代表作に「釣りキチ三平」（全六十七巻）「釣りバカたち」「またぎ列伝」「おらが村」「ニッポン博物誌」「オーイやまびこ」「ボクの手塚治虫」「新・おらが村」「激涛マグニチュード7・7」「蛍雪時代」などがある。また独特の語り口にも近い味のあるエッセイもファンが多く、「ボクの学校は山と川」「ボクの先生は山と川」は著者の少年時代をいきいきと描いていて、この中の一文は中学一年生の国語の教科書にも採用されている。

※おことわり

この原稿は五年前、二〇〇六年一月に「かまにし17」第二〇号の記事として矢口高雄先生が執筆されたものですが、都合により掲載を差し控えておりました。

このたび、あらためて矢口高雄先生の了解をいただき、掲載の運びとなりました。仲介の労を取っていただきました清水武氏に深く感謝いたします。

参考文献
矢口高雄著「ボクの学校は山と川」

（取材　都築委員）